

蘇芳集



秋 燕 高橋 さえ子

立 冬 青山

丈

秋燕と擦れ違ひたり試歩の杜
ゆく雲の紅さす後の更衣
霜降や辰砂の甕のひとしづく
藍壺に日の躍り込む竹の春
縄文へ蓮の実飛び上野山
あかつきは真水の匂ふ葉掘る
翔たむとす水鳥の脚短かしよ

一枝の萩を括りし家の人
黄色くて花卉は十で石路の花
石路の花石路の花咲く処かな
立冬のその日のうちに帰りけり
カステラはもう切れてをり神無月
居るだけの影の並んで日向ぼこ
川幅の橋渡りたる七五三

柴垣

前田陶代子

露草忌

吉田幸敏

菊の日と思へばおもひて母のこと
つくばひの水のふるへも萩の頃
黒松の仰ぐ高さや秋澄めり
諸草の吹かるるかたち露けしや
游禽の散らばる日向秋彼岸
柴垣の柴いろ秋の深むなり
つゆけさの筐の囲める石の黙

流山

八木下末黒

栗剝くや

小川美知子

江戸川の風に吹かるる小菊かな
秋晴の水面の樹影濃かりけり
炒飯に玉子ちりぢり昼の鵞
秋深く味淋を醸す堀の内
色かへぬ松や箒目立ててある
破れ蓮の中の全き一葉かな
秋風にひとりごちては歩き出す

露草は先生の花折らず過ぐ
露草忌と詠まん眸先生逝く
眸忌の露草花を惜しまざる
眸忌と思ふつゆけき午後の椅子
つゆけしと詠めば師るます露草忌
人悼む龍笛律の調べかな
供花にすぐ秋の蝶来る眸晴

音の中のひときは一葉落つる音
こんなところに秋風の児童館
つぎつぎに瀬に乗る鴨の来りけり
鶴鶴飛ぶ危なつかしく美しく
乗り越してふた駅戻る十三夜
障子二枚貼つてまた栖むひとつ星
栗剝くやいつでも褒めてくれた母

鳥渡る

金田 きみ子

虫繁し

木内 憲子

鳥渡る沼一枚に日が集ひ
湯畑のがうがうとして月赫し
霧とんでりんだう畑に直売所
羅漢の頭どれも丸しよ照紅葉
園守の坪庭らしや実むらさき
売店に夕刊届く賜日
和長男も加はる燈火親しめり

石路の花

上林 孝子

とある朝忽と匂ひて金木犀
かなかなや遠くて近き黄泉の国
惜別のあとの日数や石路の花
水音のすでにたそがれ貴船菊
ゑのころや淋しきときの手なぐさみ
かまつかの雨の雫の匂ひけり
百日草昼の服薬忘れ勝ち

虫繁し災禍見舞をあちらこちら
夜に使ふ皿の重さも白露なり
とんぼうや言葉遠くにして親し
音にして秋水われを離れざる
しばらくは灯のひやひやと凶書の椅子
秋深みゆく膳の上の魚の骨
蚯蚓鳴くやらねばならぬことやれば

鐘わたる

小島 みつ如

露けしや写経に浮かぶ師の笑顔
海霞写経のにじみとどまらず
さくら径海辺半分はや裸
秋の毒ぐも杖をもて糸切りぬ
夕顔の萩に巻きつく一花かな
夕顔や身ほとり少し整理せむ
鐘わたる鉄路のすすき暮れ残り